

## 姉との絆 (The bond between my sister and I)

オー・マイケル (Michael Oh)

(82-372(B): Advanced Japanese II)

私は今まで母、父、姉全員と数えられないほど多くの思い出を作ってきた。この中からひとりを強いて選べろと言われると、私は姉を選びたい。姉は子供の頃から、自分の同級生の兄弟とは比較にならないほど私に親切だったせい、妹と争うことも1年に1度ぐらいしかなかった。これはあの頃には結構珍しいものと考えられたものだ。それに、姉は成績もいつもクラスでトップだった。こんなにえらい姉を、憧れの対象として10年間も尊敬しつつ生きてきた。

更に、自分が大学生になってから、姉との関係も少しずつ「大人しく」なってきたと思う。例えば、1年に1度しかなかった争いが、もちろんその程度は昔と比べて全く同じだが、3度ほどに増え、子供の頃にはできなかったもっと「人間的な会話」をするようにもなったことだ。しかし、こういう姉との絆がどんどん強くなってきたら、私は姉のことを時々嫉妬するようにもなってしまった。昔はただ、姉がかっこよくてえらい人にしか見えなかっただけだったのに、姉と人生を語り合ったり、あっちこっち旅行に出かけたりしながら、自分の生きてる人生とは限りなく違う姉の人生がうらやましく感じられてきたのだ。

いつかこの感情の激しさに押され、姉に直接この話をしてみた。その時姉は、想像外で衝撃的な答えをしてくれた。「あたしはいつも、お前のことが一番えらいと思ってるの。あたしにお前みたいな弟がいて、本当に嬉しくて、たまに

はうらやましいと感じることもあるわ。」この会話をきっかけに、私はもう「姉の人生の<sup>すさ</sup>凄まじさが、自分のをはるかに越えている」などの雑念は頭から消し、ただ今の姉がいることだけで、私は本当に幸せな弟だなど思えるようになったのだ。